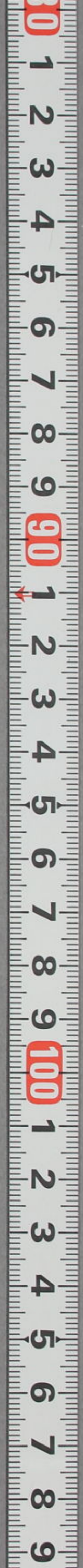


1 部
234
2





北窓瑣談卷之二

梅華仙史橘春暉著

日向國高千穂峯とりのむ彼玉に二所あり一ハ旁崎山をりし
 又一とら千穂とりの山ありて豊後より日向へ紙の道あり
 余考ふるに神代よりりし所の高千穂峯ハ今乃旁崎山なり
 諸書に多く旁崎山ありと云ふは是ハ彼地よりありて
 臆ゆせむ故あり昔より日向國高千穂二上峯と稱せむ
 其山二峯有るに因て名付ぬるに明あり今乃旁崎山東西
 小峯ありてお對を天逆鉾と云ふハ東乃峯あり殊小九洲一
 比高山とて他山の比を命をとりて今乃高千穂とりの山

衆山乃中水何里也。是と秀とる山ふも何と汝。汝水二峯ある
もの。一河は彼地へいりて入る人も高千穂の雲霧あふると論を
中とむしとく知ぬ。

一粟一絲を志くなく米六合穀ほむ漢の時分より此法く
今日本少しも諸國はく米と北水少くハ粟一絲を磨りて
六合穀得るとりて幾内方地まぐも半磨と称しと一絲より
五合をほるとりて是北國ハ米大粒まぐ皮薄く中水ハ小粒
まぐ皮厚た故あふ重なり
一かじのとりよもの近た頃人乃稀く又書ハ樂しむもの
聲さやあまぐ駒多ふ似廣たを愛あるとに飼てよれよの

あり形も小粒蛙に似く色黒く瘦く北山矢瀬小原色の
谷河乃流は信た所又信とぞ。谷河又かじの明あふ申すま
ぐれ小石流多あふ乃落合とりて吉歌なりとて誰人の歌や
一山はあまハ秋の日よし。川はたふるまは日よし。鹿もくりて岩
根乃草蔭あふに柳の蔭より舟さし出ると又くもいし
高たより低たをるふも煙あく晴はりてあま何うの風
かこも誰人の里あくと指けし合たもあし
一世の人爵氣乃病ひとく。打ル臥筋と何とあく公地樂り
汝顔乃色一河くく氣カとわしく瘦申り若た頃此あや
と無た人も大くも愚ありと知ぬ。け病まぐ死申乙も

まゝおろのたげに只危あやうくれば、せかへし生延いそひまゝしんこ
よるれと朝山あさやまと伯おやうきと終はつりし実まこととを思おもひし
一 滝たきの向むかひの河かをく呼よぶも来きぬる相あう見みえり
あぢしても滝たきあしやと思おもはる

一 昔むかしハ都みやこ何なにが御内ごうちのちハいづれハ何なにきみ里さとゆく維い
殿どのあぢいのみちやと身みのそはれぬる未定みぢやうぢを成なり
きこへしゆめを屋やに世よをまへ思おもひ、さかたに引ひぬるもそ
世よ後ご多たくぢも志こころけなく下しもはれまゝに心こころをちりり
らゝしげふ昔むかしの文ぶんれ上かみも恥はづかしくは終はつりもいづれ長ながた後の
寐ねごめがらあふ過とほし年月としげふも思おもひはげしくあふぬりか

あし

一 我われ友とも源げん子し和わが家いえに用もちゆる茶碗ちawan何なにの管くだを吹ふく双ふた調てう
ふしれも茶碗ちawanおろはるる鳴なる子こ和わが父ちち長なが昌まさは茶碗ちawanを双ふた
調てうくと呼よぶし

一 丙午みづのえのこ小澤こさわ芦菴あさむらよた筆ふでを求もとめし、ぶらぶら弾ひ
し絨じゆうろふ漆しやくふも似にそ其音そのねはやのあはれむ、よく樂人がくじん某たがひふ
尺しゃくせしむしふ、樂人がくじんも彈ひ尺しゃくに絨じゆうろ響ひびけ、是こゝも古ふるた
音ねもく志こころも木理きりも尺しゃくもよ今時いまときはほがた筆ふであはれどかく
鳴なるも何なにがせしとて尺しゃくにぬ、芦菴あさむらよていづれもよた筆ふでを
まゝし手てを入いれ、あふよく鳴なるあし其時そのときあしと悔いひふそ

久々家貧し先中より五兩乃金子欲り先夫て買求は
筆の上下乃裡れ穴より破石りく甲の裏を磨りしり
可も証多る人対結さるるも遊りもやせて無家解よ
敷十日のよあしきりく儲糸をくけく彈試さふ果し
奇妙の音出く勝れく名岳と成りぬ皆人も感し
たししよ或日中嶋道成来りしりく此筆をゆしく彈し
む道成をえくぬも羨し先筆を所持しりしりくかとり
芦菴少しも何しりくぬもかた所もあたるやと同道成何
いはちるを先といふ先はくむ此筆君もはぬくを先し失
禮ら申しりくそ禮の上手に先筆一面をせざらる

恨とあれど贈りありとり。道成も思ひくけひも驚たる再
三辞せりりも其志乃厚うりりく悦ひりりも其日る
うす携へく海まり
一何某の官久しり小澤芦菴り和歌小長しぬりり物を
及ぶれ。毎度御使して石れりきとも圓く辞して糸くばり
たれむ。隱者乃りり好ぶ先人仕事あり。風雅のりり強りけ
方へ呼んりりも矢禮に似れむ。あしりりも道理ありりり
よりこそ尋ぬをりりりり其頃芦菴天明の火災小家を失
ひり。太秦の地藏堂は恒居せし草菴へ官りりりりりり
終りりり。芦菴も其りりりりりり始て御用又りり上其翌日官へ

御禮ふく。其後より折くハ官へ系り上りたり。芦屋も世
上乃俗人の肩を聳く。権貴富豪の家小属し居りて
仕ふるハ格別よし。近世ハ跡くハ人品あり。官小
さるりの尊貴を風雅のよめに履し居りて。三里小近き所
を尋訪しせよ。古人乃風所りていとむかた御公とく
かりたり。

一寛政子年小澤芦屋重た病ふ。臥く。久く恨と居りし
小富豪何某等一編み。のく和歌乃門人あましう。其
病ハ乃時小。一度も尋さるし。芦菴病愈く。恨と
を尋く恨と情。何某も世は夢さる。富豪あり。物習ハ師の

病ハ幸しと笑も。くも来り紡い。又敷多た男女乃り。あ
れむ。腰許女一兩人多々抱の。乃小付並てもよかる命し。志る
小一度も尋さるハ人かあれたのありとて。命をおさる。い
責怒り。出来のま。我絶ち。其命は真一。首の和歌を伝
人乃世は富ハ系小。や。病の風をすつる乃。光り成り。理
と保みかしの短く。く。た。あ。ま。あ。れ。と。其。情。は。顔。い。て。水
なき。り。り。の。次。り。し。

一人く星アタリ。く。赤集り。クワタラ。ト。あ。と。も。て。こ。や。め。る。小
て。も。夜。更。て。屋。乃。上。よ。の。ぢ。り。は。其。星。と。此。分。野。あ。く。割。り
何いぬれむ。近た何り。乃人ヤ怪。く。も。思。い。何。事。と。く。智。あ

しるべき可れもとて割して下しぬ

一曉近^{あけちか}たてて友人乃家^{とも}を繕^{つくろ}りて海^{うみ}を月西山小^{つきやまのこ}落^{おち}り

星^{ほし}の色^{いろ}さかかしく白^{しろ}く染^そりたる小朝嵐^{あさのあらし}多^{おほ}くみたれも道^{みち}し

年^{とし}旅路^{りょと}遠^{とほ}くおしとて新^{あらた}く記^{しる}したるし折^{まじ}りて似^にく人^{ひと}も

あらしの別^{わか}を告^つげぬ細^こましくしと今^{いま}所^{ところ}の中^{なか}へ小^こ思^{おも}ひ出^で

て涙^{なみだ}のわらしと為^なる理^{こと}

一物^{もの}よく書^かく人^{ひと}を筆^{ひつ}硯^{いん}をすえやく小^こ書^かき物^{もの}よく續^{つづ}く人^{ひと}の書籍^{しよせき}を

おろその小^こ世^よに浮^う屠^と屠^と氏の経^{きやう}卷^{まき}をさるむし海^{うみ}弥^や小^こ僧^{そう}とくも

續^{つづ}くたれ心^{こころ}先^ましくお置^おけしとれ小^こ智^ちりて婦^{むすめ}女^{むすめ}充^み

安^{やす}ん経^{きやう}卷^{まき}くまらしくむきとる今^{いま}時^{とき}の書^{しよ}生^{せい}の聖^{せい}經^{きやう}をり附^つ

あらしよも賢^{けん}典^{てん}をり足^あゆ具^ぐとさるハのあらしをかりたる小^こや

一伊^い勢^{せい}の律^{りつ}の人^{ひと}を龜^{かめ}井^い金^{きん}分^{ぶん}りたる人^{ひと}のり小^こ鼓^こをよけ鐘^{かね}曲^{きよく}をよけうと声^{こゑ}

律^{りつ}のり小^こ妙^{めう}子^し到^{たう}り其^{その}家^けに鶉^{うし}と云^い小^こ鳥^{ちやう}を飼^かり鳴^なくせ樂^{がく}りてか多^{おほ}く

乃^{すなは}ち金^{きん}八^{はち}鴉^あの律^{りつ}をす知^しる其^{その}調^{てう}を合^あてて鐘^{かね}曲^{きよく}をうとハ鶉^{うし}忽^{たち}鳴^なりて

金^{きん}八^{はち}調^{てう}を變^かえられ鶉^{うし}鳴^なり能^{あた}りて常^{とこ}に鳴^なりて大^{おほ}知^ち氏^し鐘^{かね}曲^{きよく}をり

一余^よ世^よ間^{かん}に蘭^{らん}を種^{くさ}く衆^{しゆ}をえ者^{もの}をえり小^こ鐘^{かね}ありて寒^{かむ}氣^きを避^さ

根^ねのり香^かい成^なり入^いりて常^{とこ}に鳴^なりて小^こ鐘^{かね}ありて備^{そな}へ花^{はな}咲^さけし

た其^{その}花^{はな}を摘^つ捨^すて咲^さけしむるもあしづのあ教^{けう}ゆゑに花^{はな}を摘^つ捨^す

ふしとや花^{はな}乃^{すなは}ちを愛^{あい}せんが常^{とこ}に鳴^なりて常^{とこ}に鳴^なりて常^{とこ}に鳴^なりて

とふしとや花^{はな}乃^{すなは}ちと問^とふ其人^{そのひと}善^よく花^{はな}を多く咲^さけしむ

れ其蘭瘦い〜〜〜養ふるす甚し。故小生其蘭を愛す
ふ者其花を開く〜〜〜事あり〜〜〜。余これを知り余が家
乃貧を以て其世の金銀我實に愛し〜〜〜家を以て其
織を費〜〜〜美服我着せり〜〜〜。錦を費〜〜〜家宅を以
て其事あり。錢を費〜〜〜味を貪り〜〜〜。而後小皆
富を以て其余の帯小家我欲する故に金銀を博し是を用
ひ志乃其何事をも自由せしむるあり。〜〜〜志をも以て
〜〜〜不自由よ〜〜〜。初より金銀ありて公法〜〜〜いふ
ふる志のよ。是蘭を植花をるるに似〜〜〜ずや
一海北友松の画々源平乃軍の圖成りし小繪を博し

士一人も無し皆長刀をかりあり。又兎を亦居されたる者乃
改小鷹帽子錦きり昔物結の画成寫し〜〜〜八画工も公博
其命を〜〜〜あり。繪の多く用ひられ〜〜〜。足利の末信玄謙信
の頃より其事ありや
一後世や〜〜〜。諸島の通路の産物吾物等近も多し
其り。或人乃其煙草に慶長十年南蛮船より種を後
漢去〜〜〜。後其も大徳同〜〜〜。始の程ハ火災乃おそれ
〜〜〜。官より其禁せり〜〜〜。其禁終り破り〜〜〜。今あ〜〜〜
飲食も其〜〜〜。漢去も始ハ禁せし其禁破れり
〜〜〜。味の美あり〜〜〜。酔て面白あり〜〜〜。何〜〜〜。腹は

あも何々次何のふきやまかまく人の好むものあり
故とも知つし番椒も慶長十年後まき西氏ハ寛永年
中琉球より後まき甘藷も元禄の頃琉球よりまき
里搵持ハ寛永乃以蛮玉よりまき三弦ハ永禄年中まき
芝草乃頂澤角とり音人專ら弾て各人の名何し鉄
砲ハ弘治元年南蛮国よりまき鎗も楠正成より始まき
頼も信長時代より傘も天正年中より燭燭ハ文禄年中
より伽羅油も正保慶安の頃より糸物も東山殿の以より
始まきりしとぞ

一楠正成小佐のし武士乃中ふ大塔宮芳野乃奥の御戦の

二

糸食に飢乏しく御難義ありしといひ成嘲甲く一命を
まて戦りし條む武夫たたく二日三日食せられむし何
程の事り何しと柔弱なる宮うあといひくれむ正成後
成顧ての代氏士成あしむのれも朝飯の遅れをくれし致
事小多死栄耀も生育てる男あり事には隙む者の腹中空
虚あてハ働りたかたをあらぬ馬鹿者あり佐乃中ゆり叶
えりしと幼齒せしれしとぞ
いごんこのうか ぐきんちう ころむらみま
一肥後豊後日向のあいご年齒する折山中ふ五ヶ村那項
村推葉山并宮谷なといへる取ハちしのかぎは山中なり
右の那項推葉山辺は安永のころ病狼野しく出く

人を害せし小不日小敷十百人疵を蒙りり領主聞
給ひて是を伺ひて医師を遣はし療治せしめられ
しに医師さつぎく山中に入大なる疵ハ縫りけ小児
まじりてもおしも痛むとなし此地地をくくはざる故小や
又狼のかみたる由一疵り毒集り居くいたる光(ぎ)はるふ
や最不思議なりしと共医余は詰(つ)とまき

一源孫檢校も言保年間よ京都ゆく三弦乃両子とくを名
大(た)くふく次人々感(かん)しりり。先年小及い(あ)り時人子語り
くろハ天地の綱子ハ二百六十のちをのまう。やうく此頃ハ綱
子(こ)のちをを知りし。其(その)鏡(かがみ)の蒙(ま)るハ志(こころ)を論(ろん)ぜ次(つぎ)何(なに)

もあれ常(とこ)ふみの警(こ)り若(わか)くてハ何(なに)か

一天明成申乃禁裏炎上小沢芦屋

今(いま)朝(あ)す小(こ)焼(や)けの系(けい)もあふりさ(さ)やきの人(ひと)乃(な)玉(たま)意(い)の庭(にわ)

感慨の湧(わ)り何(なに)又(また)西(せい)洞(どう)院(いん)殿(でん)の

立(た)ちあふ煙(けむり)乃(な)小(こ)思(おも)ふそよふの脚(あし)孝(たか)乃(な)恙(や)あつれと
忠(ちゅう)愛(あい)の糸(いと)杜(つ)子(こ)美(み)白(しろ)樂(らく)天(てん)小(こ)儀(ぎ)も尋(たず)常(とこ)の和(わ)歌(か)者(しや)流(りゅう)を以(も)

一王(おう)元(げん)が論(ろん)衛(ゑ)小(こ)大(だい)山(さん)の高(たか)丸(まる)天(てん)小(こ)交(ま)り雲(う)小(こ)入(い)るを去(さ)るし
百(ひゃく)里(り)小(こ)く壘(たい)塊(くわい)を足(あ)げとく王(おう)唐(たう)土(ど)乃(な)里(り)程(ほど)も遠(とほ)小(こ)日(にっ)本(ぽん)
小(こ)五(ご)六(ろく)丁(てい)も尚(なほ)多(おほ)くしあれ日本(にっぽん)道(みち)あて十(じゅう)里(り)むかひを新(あらた)小(こ)

て又えきとてまゆ。これを見れば日本も高山多たふあり。富
士山白山立山等外諸列の名きた山といひ皆數十百里茂
隔つといふもよくある

一秦舞陽といひし人其里小何し時人を殺して物の數
とせ伐の塚をさふらうとせどといふ程の人ありしを。一必
たが程く、皆勇者ありといひしを。秦國の階を昇りし時
と顔の色變りぬ。何まうに常く小猛くいさして又ある人ハ
大事の隙をて必んあれまをのあ程。松松の雪小塔も小
常小吳やうあるまへるを。常て人ハ事毎死時ハ情深くあふ
をうたをよるれ。莫耶乃知も此は物を割る成りて利を

一海邊まで月刃を舞ふ。湖水も水気立ち海乃縁免ふハ
勞きなり

一春秋ハはらうあり。夏もく山麓の海を流きまほしひし
て暑き哉。夏もれくも。冬ハ更し夜れ寐覚もそれとまゆ
田鶴の舞やうとせ。まらふ神きあし

一又免くも。務もくも。た人も必禍も多きものなり。高明の
家も鬼神これをみくも。林も秀る喬木ハ風必くれを碎た
出れ岸も出れ氷を氷と崩す。顔人のたはらふ

一國初乃以或諸侯。遠遼劫を劫を二萬石乃録をて。石抱
られし。匹夫を也。二萬石をよつられし。谷量戦ふと云

ふが今時の人乃多ふ病を不何くも。又是成受て道分こ
と思ハば申し劫奪が呑量。實は豪傑の士とりふが。後よ
聊の言る合さるふよりて碎し去る。二鳥石持事
りくづつを脱くし

一衣食足る礼節を知ると。覇者の言としくも感さるる
こそ多かれ。余醫をわして負家れ病人を治さるふ。其家
の又或は母乃幸充くも病ふ。其子たる者めいふ。老
人久病病ふぬ。かてる傍の老も難義ふぬ。且も
亦も苦悩ふと。まく往生せられぬ。申人も亦も老
たもかり中事ふゆ。かづきとも付やさでる。よても

なれ。子と治療を軽しやありとい。格ふ乃負家格ふの
不孝なり子不何ぬ。余か乃と死言業をゆしと常くは
し。是人の子たるもの。かりせむるも思ひよりく。云出を
病を治す。しや。医もけ。病を治す。治療を絶さ。病を
情もた。その力を。思ふ。病を治す。親子の
言。恩。愛。實。情。乃。多。あり。あれ。負。富。を。そ。て。厚。薄。の。言。
病。不。何。の。い。も。衣。食。を。給。さ。る。の。急。あ。る。より。か。殘。忍。の。情。
とも成さるるあり。

一程明道曰内重則可以勝外之輕得深則可以見誘之小誠
小学者の安逸を欲し或ハ他の技藝小耽里或ハ酒色を

放し或る出處正不正を不論し、利禄をわきあを
軍小此語我々し、當着死し

一張横渠曰人多言安於貧賤其實只是計窮力屈才短不能
營畫耳若稍動得恐未肯安之、余今の世乃寒儒を
とる小皆此倍よ洩るし

一又曰天下事大患只是畏人非笑今の世乃人おしく才も互
志も互る者生涯聊の功も立てあ、草本としも朽果る
ハ皆小事小人の非笑せし、我畏るや多かり豪傑乃士を
賢者の非笑を畏る世俗の非笑を畏るもあ、る也し
一朱舜水先生水戸あり、家中乃士乃徳小一僕を召して人して

ル主人家来乃礼義嚴然たるを、日本君臣の義正し
事を言と感心し、唐土もこの風儀あり、明も
不甲斐あり亡いし、たをを、歎れしと

一日本乃武士常々これけ、一の、君の馬前、討
死を命し、只管小命我君の、と、思ひ込、敵小
勝んと我考へ、不我保し、希い君を善道よ、い
しを思ふ、君を愛する、新我願う者、此
事を、今の儒者文人、笑ひ、日本の武士を、愚にし
て大死を、悦び、君も、忠を、知、唐土乃人、
こ、恥を、恐、押、死を、命を、

あはしくあの人存し幾年かたそありとも其ことをあし
おんせく功を建る人多し程嬰杵臼伍尚伍子胥など
しめても思ひ合を盡しといふも余は二途をゆく考へる
小儒者文人の論を繕てりかゝる論り出るよりそ学問の
由る文弱乃風起りて士風衰へ後ある生をむさぶり利を
全ふも多しを心よかけて恥をり知らば高賈のしくあは
ゆくと多し。彼は馬前小討死する事ぞかりハ匹夫乃義は
似たりといふも其君の縁をたみく其君の事小死する
に君乃るを正にりゆれ不正にりゆれ一命をまつに君の恩
を報ぜん其身一分の君臣の義も遠ふといへば然らざる

又一命をさくもな程あるも其餘の事ハこのあはれといふ
も人々の智略は強く小忠勤をそとよ小廉略ハ其
かゝる。されど士は休者おすれ出るも。只ひとさる小屬一
の事何ぞ。君乃馬前小命を辱るると公擲ると才一義
あるは場乃公盡たしふまき後子。始て学問しく色々の
忠義の長しやをり知らば。彼は伍子胥あよのしくわる
るにゆきあくもあく。物死するより死れむ勝ると言ふれ
ども。其才智は富貴傑の質あつてむの事あはれ。不
才柔弱乃人ゆして伍子胥乃依りて学びむ。必生を盗む恥
成志その不忠不孝人とあべり。世間小不才凡庸の人を百人

ふし〜九十五人まで才智倍々豪傑の質ありて數百千
人の中の統つふを武人を好うむし。されど一統いつ士た多おほ者の心
のけり。前まへに討死の事を第一とを爲し。此一統いつ儒者文
人にはそと。容易やすのりなり。小なり。平素へいそも風正かぜただし。士
風義氣ふうぎあきて。係けい小なり。出で来きたりあり。唐土たうどの柔弱じやくじやく小
て及および西せい二公にこうの後のち多おほなる君きみは乃すなはち義平ぎへい素そよ正ただし。いづれも
也なり急いそよの頭かぶ御ごし。

一 芝山殿乃

采元さいげん ひとを忍しのむ今いま仕つか身に志こころを親おやの志こころし昔むかしを思おもふ
実まこと小こ孝かう子こ乃すなはち情なさけをさた御ご休やすあり。西せい洞どう院いん殿でん乃すなはち火災かさいの御

歌と尚なほ今いま忠孝ちゆうかうの對たいとししを

一 鎌倉かまくら右みぎ大臣だいじん乃

そのゆ乃すなはち矢やありはくらふその上かみに雨あめ敷ふたり。那な須すの篠ささ系けい

又

采根さいこん踏ふをりれとえれと休やす豆まめの海うみ也なり沖おほなり。小島こじまは浪なみのよるる
皆みな悲かな壯たけな今いま時とき乃すなはち菲ひ弱じやくあり。小こ似にど。然しかる小こ其人そのひとの父ちち乃すなはち風かぜ亦また似にも
みし。小こ何なにも。しや野や史し乃すなはち信しん方かた所ところ真まことあり。さるる小こや
一ひと寛かん政せい壬にん子こ浪なみ花はな乃すなはち火災かさい小こ池いけ某その家いえも燒やく。里さとし。改あらたえ
造つく方かたとして其その土つちを深ふかさ三尺さんせき堀ほり捨すて。新あらたなる土つちを入いれ。磔はりゆ
辱おとしし。とり。番ばん頭だう某その練れんて。き。主人しゆじんの。三尺さんせき乃すなはち土つちを入い



十四



十四



十四

ると何程の費りありし。猶氣の死しと頼穢きも何れぞ
 子孫に傳ふるに家宅清浄にまじりし聊に儉約をりて
 かくも再之何れに番匠とて父を以て此分限ありて
 尺乃土を習うと俄に脚の費ありと土成り由るといふ
 高貴の人乃御事あり。町人乃を乞ふるも何れを子孫
 小者然るを乞ふハ穢を傳ふるより不吉あり。某が居りし
 乃其よりけし金ありとていふ。主人怒りて家來の身と
 しく。是むより乃事を主人の意成りてや何れと氣を
 を換しむれと。番匠とてかく父を。控練争ひて後我家に
 王自殺しとていふ。主人を乞ふを乞ふ悔ひ感し土をかゆ

一を思ひありて理總高貴の家をても名も立し富貴な
 と何れも。かゝる患はをも扶持し居り。數百善石を領し
 強ふ緒侯の家も恥しきや
 一孔雀を乞ふも生れり四年をの程し羽毛皆揃ふりありて
 二三年の男を雌雄もとれと。且のれがた程小羽毛生れ
 揃ふりありと。孔雀は長命あり。且十年も保つりありと。人
 家も其のてと。かゝる事ありと。山野に何れも百年も保つ
 一余四十と一つと。ぬと。いふ年一人乃男子成りけぬ。上
 ち皆女子に。男子を始あり早くも成長せよかし。ある

教了。何よあを命死あど色くふ思ひはくふあぞ。我身あ
かしくと程をた事をかかろふも思ひはくふあぞと獨り
笑ひを催しき

たのう乃乃志けとふ志くねとひとかなる子の末を侍き
とあしぬ人の子を思ふとるかかろふあぞ

一安永の以京師くわんしに幕村まぐら換技かんぎといひ警師けいしあり。以換技かんぎはひ
中せし人乃前まへまで三さん弦げんを弾ひみ其座そのまの笑人わらひよ色々乃公
阿れむ面白くひたて養やうらきととるち過あやあり。かあこ乃
人の公こうなけつとああこれ人の公こうふのふり候あはれされむ我われはつと
も何人乃笑わらひ前まへとる我われ持もおの藝ぎを昔むかし量りか一いつとらひ弾ひて

いづれもその座の人よ笑せしとる思ひはくふあぞ。只ただ神明しんめいへ寺納てらなまると
と公こうはく弾ひると候あはれし。彈ひみむとる換技かんぎ乃公こうけ上う手て
乃名高なかつかすしむあし。か候あはれ何なにの藝ぎとるも公こうはく候あはれま
もを聖人の自省じやうしやう不救ふきうと宣のたまひ。又慎獨しんとくといふとるい公こうはく
おまろと

一長崎ながさきに持もひ一日いちにち唐人たうじん六十人ろくじゅうにんをかりと宗福寺そうふくじに終つひ月げつ令しやう集しふ
し。酒飯しゆはん同席どうせき不ふせし。懐なつかち互あひふし。通とほをれとる言ことば倍ばいハ一向いこう
も通とほをせし。程ほど赤城あかぎ程ほど養拙やうせつ張秋谷ちやうしゆくあどあし時ときく
一深草村ふかぐさむら乃瓦師わらじと次つぎ多た身み又利助りすけといふもの廿五六才にじゅうごくさいあり。寛
政けいせい辛しん亥がいの妻つま姫ひめと風乃公かぜのこう地ぢを病やまむし。多たりとかく愈なほこ

俗世の上の人を敬言と申し

一 揚海一得とて書ふ曰田汝成り委巷叢談を刊て杭州

人一日吃三十丈木頭以三十萬家為率大約每十家吃

推一分合而計之則三十丈也

一 又云唐土乃茶店ハ色々の煎湯を賣るとあり茶も何り

草湯も何り砂糶湯も何り橋皮湯も何り故小本草其

草の集解ハ唯貨湯家ハ是を用ふと云語何り貨湯家と

も湯を賣る店あり

一 馬の各種々の名 ○ 騊 有日輪 眼瞳外 ○ 白馬殊駿 唇黒

○ 駱 カハラケ 黄白尾 鬃クロシ栗色ト白毛交ル ○ 艾若 カモカハラケ
此黒尾ノ通りニ黒毛有リ足爪ニ黒

○ 驪 カツクロ 鉄聴ハアラミトリ ○ 駮 白ツキケ ○ 駮 赤ツキケ ○ 駮 サハツキケ
鉄馬、真黒

○ 驥 レロツキケ 泥ウス白鬃尾 ○ 騊 白黒雜色ナリ ○ 驄 レンセンアレケ ホレアレケ
正ニ白ク爪ハカリ黒シ

○ 驄 アレケ ○ 馱 アラ白 ○ 傍驄 ゴミアレケ ○ 駟 クロアレケ ○ 駒

○ 騶 ヒメカウレゴンダ 紅梅栗毛 ○ 騊 ハラ白 ○ 騊 カゲ 赤身黒鬃ウス黄色
黒栗毛シハ栗毛

○ 騊 ヒハリケ ミツヒハリケ ○ 騊 黒身 ○ 騊 白鬃 ○ 騊 額白 ○ 騊

○ 駒 黒白毛

一 季緒り相馬經といふ書二卷何り。明の正徳年間之作又穆

公相馬經といふ書も何り。日本も百馬の圖何り是も正保

年中よ 御命も狩野主馬助尚信画林家ハ

質ありやぞ此圖も今もあり狩野家の秘所とて

一往古

此乃言其法考へし人の所をし

古法も其用の多し人々を産して是を延し是先を言ふ

一日の入り時よ雲紫黒ありて中小飛紅尾數十條を交

由れむ。其翌日必大雷何れもあつて六七十年前京師の大

雷の時も満天に雲一色ありしと

一天夕方赤くあつて血の如く家々中も照り入り人々

あつて赤くあつて血の如く家々中も照り入り人々

一戊子乃年五月晦日より閏六月を暦く七月朔日して西

を湖あり減るる一丈六尺は年五月三日より亭星出

一枇杷乃花多く付時ハ今年麦作必豊熟ありと

一淇園先生有斐奇剖記小野狐最鈍其次氣狐其次空狐其

次天狐氣狐以上皆已無其形而空狐其靈變更信於氣狐

至天狐則神化不可測人有為物所役頃刻行千里外者乃

皆空狐之所為大抵離地七丈五尺彼乃得提之行如天狐

乃不復為人害此說善幻者話云

一若狹小山谷乃多其足の燕河里常燕の比これハ稍大

其所乃人多風多と云木曾山中にも亦なりと云木曾と

多其大燕といふ是皆胡燕あり

一千里眼といふ神と順風耳といふ神を唐船中を皆察する。西

遊記に天上一ササキ上聖玉帝ササキ甫ササキりて其臣ササキ小千里眼ササキ順風耳ササキ

何り。小里眼ササキは下界ササキの事を凡順風耳ササキは下界ササキの事を
言ふこと

一傳前ササキか將殿ササキ學向ササキを好ササキむ。流ササキの雅樂ササキをもよササキひて

小吹ササキも笛ササキをいササキひ名付ササキしと中院ササキ内ササキ存ササキふ小向ササキすひササキ小

田ササキ籍ササキと名付ササキしササキ是ササキハ

その小翔ササキりササキて幾度ササキもササキおのササキ田ササキ籍ササキをササキ受けぬん

とふ和歌ササキのササキはササキ此ササキ笛ササキをササキ京都ササキのササキ辻ササキ山城

守ササキ小ササキのササキ小山ササキ城ササキ守ササキ天子ササキ御笛ササキをササキ教ササキへササキしササキ小ササキりササキ傳ササキ笛

をも 内ササキのササキしササキと

一宋沈存中ササキのササキ後漢筆ササキ後ササキ小曰ササキ二声合ササキ為ササキ二字者ササキ不可ササキ為ササキ正何
不ササキ為ササキ蓋ササキ如是ササキ為ササキ爾ササキ而已ササキ為ササキ耳ササキ之ササキ平ササキ為ササキ諸

一同書曰ササキ多ササキ一壯者ササキ以ササキ壯人ササキ為ササキ度

一同書曰ササキ唐開元錢重ササキ二銖ササキ四參ササキ今蜀郡亦以ササキ十參ササキ為ササキ一銖ササキ參

乃古之ササキ案字

一同書曰ササキ毗陵郡士人家有ササキ一女姓ササキ李氏年十六能詩ササキ拾得破錢

詩云 羊輪殘月掩塵埃ササキ依稀猶有ササキ開元字ササキ想得清光未破

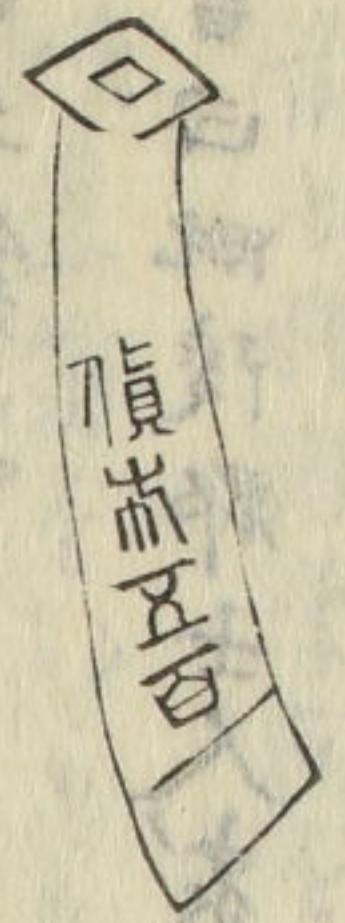
時賞盡ササキ人間不平事

一説鈴乃中ササキ南粵有ササキ銅鼓其制高可ササキ三四尺有ササキ上面

而無ササキ下底其聲亦不甚大名曰ササキ諸葛鼓ササキ徭人謂是孔明所造

一 飛澤 山下岡本村 コセン小十郎 花里石谷小孫十郎

浄見寺野ふおつと云狐多う皆名狐あり。孫十郎云
云吾天竺小在し時文殊キレと云里しけ奇怪の談云



是蒙城古刀宋宣和五年郭傑為豪

刃蒙城令村人得之田中柄端有方寸七三字彷彿隸書背
右方孔不透身形如刀文曰貨布五百疑王莽所鑄

一 唐書小玄宗開元八年冬米一斛直三錢

一 寛政二年庚戌二月十四日昼未刻一天云每くく雷鳴家

只一声之門人林仙藏吉田俊卿と云云見る云後小笑く小

近江丹波撰傳云く同しと云或人のくも方乃天小大

ある大物く起くるありと

一 佛組統記天台智者傳曰南岳造金字般若命師代講手持

如意臨席讚之曰可謂法付法臣法王無事ト

一 九尺の俗好んく焼酒を多く飲むるあり肥後小一

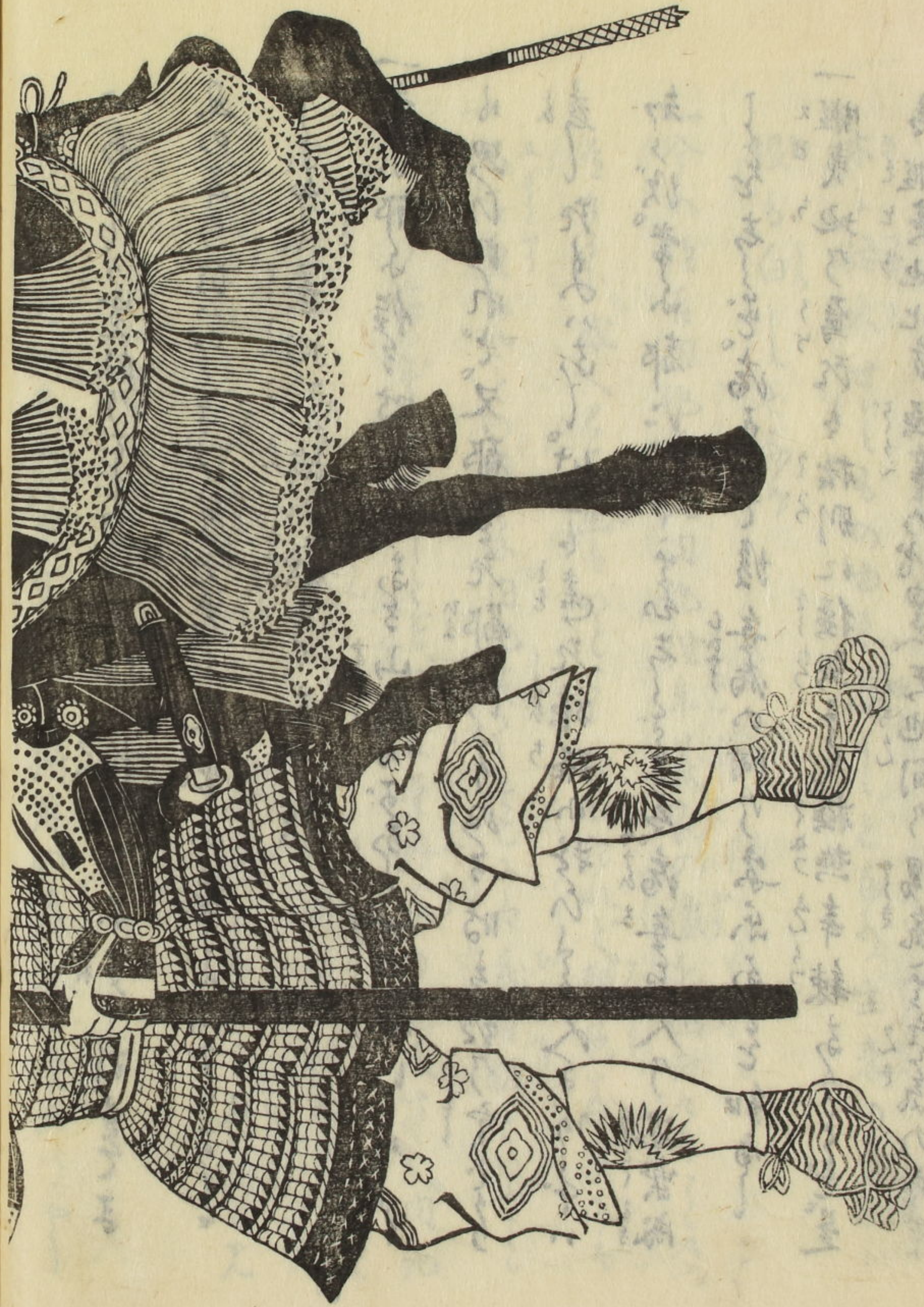
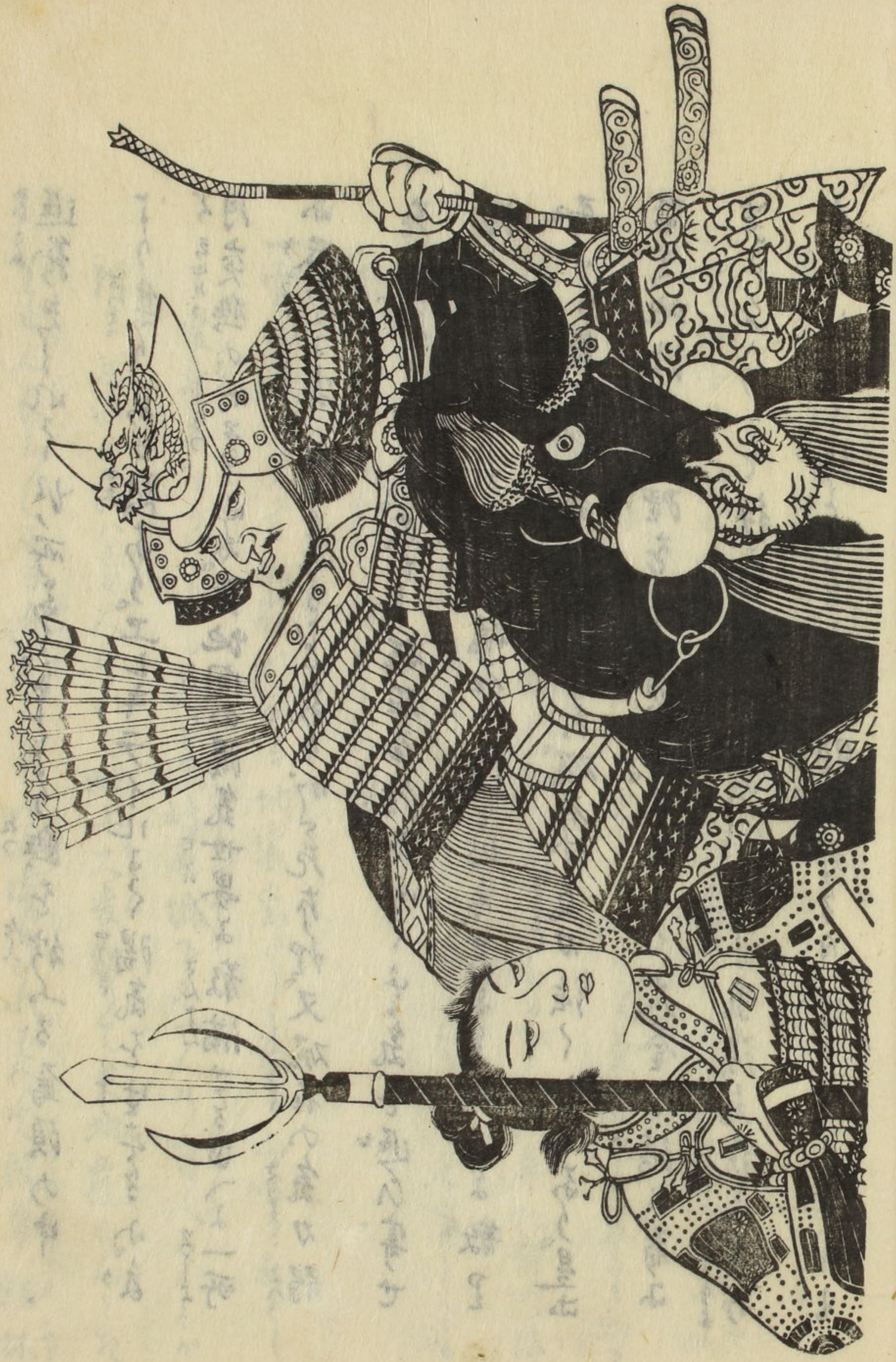
婦人大に焼酒をのこく火を強くし火燵小酔ふ

たる不忽ち口中より煙出くふもなり死したり小児

あどおのま多きとく焼酒小酔と時ハ火燵を

遠ざりけとせ

一 李根白皮の白うとざるハ幾内の李樹多くハ挑の



追跡をくわくは所あり。もとより熱を結ぶる為頭の中。

より集り来る故あり。正しキテイルより陽氣を生ずる小。

月炎熱の時多し。天地間の陽氣世界に散満せる由一。

小器中不寄集り来るにあり。がたは理。又磁石の氣力弱

たを強くする小。大なる磁石を法を以て其氣を追ひ寄せ

順く碎たきく小。磁石と成る時。大なる磁石に散り

飛ぶる氣力小。所へ集る由。磁石の氣力強くなるあり。是亦

皆天地陰陽の理を知り得し。又鉄より大釜を鑄る者小

字。夕、ラよそ鉄をここのに。その夜に氣強た散る炭か

くても鑄る湯となる。かゝ暖氣なる日八炭五俵も十俵も

多くつり。猪鑄乃熱し。中十分ありぬ。と皆同理あり

一寛政壬子乃去肥前國雲仙嶽の崩。是乃前。數日室中小。

うけ船多く往來する人々。及んず。是嶽より登る者

氣よ通迎の海上。船れ。船は。往來船前の津

浪乃前。室中小。佛神の安。危り。せるを。く。及んず。し。小

嶽。夷地の人。畜う。は。き。る。あ。り。也。し。

一雲仙嶽も。え。く。山。崩。れ。或。る。地。震。を。さ。し。或。る。山。崎。り。あ。り。し。

て。變。異。を。た。り。や。り。し。打。り。多。崎。原。城。下。小。一。人。乃。盲。人。を。く。る。が。

附。よ。あ。れ。て。我。ハ。盲。人。に。れ。て。此。上。大。變。起。り。て。天。地。覆。ら。ん。と。い。

ふ。人。あ。り。し。ゆ。る。途。を。る。り。叶。は。ば。い。れ。む。と。て。投。草。鞋。杯。

晝夜身をたもたせしむるにがたは津浪所くを漂没せし時。その
を改まらばとて北をさして迹をゆるぎなき崎千々二三十里あげ
よりいづ。嶋原中の人多し溺死しるもの。彼を改らるる毎事
ふ迹乃ひとせし。ハ常く一途のみがけ海に身を居し故に
一寛政五年七月十五日江戸小雨降るを申す毛を降るを前
丸の内辺ハ別して多し。多しハ色白く長サ五寸許り
毛をたつ尺二三寸小なり。色赤たれども。系つる
親した人より拾ひし毛を送り紙せしが。馬の尾れぬもの
毛あり。江戸中ふあまのく降りし事。何歎か毛をく幾万疋
乃毛なりやいと不安の事なりた

一筑後の國の山中の一男子獵人の鉄炮のせき玉より
當り左の肩先の取より入り肩の下の一取より其
玉皮肉のちつごみ留れり三十日ほど過る瘡種の如
く破れ潰れし肩の下肘の上の取より出たり筋骨
骨ハ傷らざりしや手臂のたたりきにて別儀ありしが
數月を過ぎり後鬢髪とごとく脱落しり眼中をど
も色変りさあがり癩病の如く今年に至りいろ
し療治をせどもいまだ不愈と相良千里のうらき
火毒の肉中に残りし故にや其後いづありし
きうげ

一安永の頃余伏見に在るが一とせ雷はひたしく
 鳴る所へ落るる更の有しは豊後橋の南の畑
 の中は稲などをかりいる一ツ家のらりるは耕作
 の者十人あまり逃げり雨と雷をさけ居りる
 不幸も其小屋のうへは雷落る集りをもる人の
 まん中へ透りぬ是かためようたる者数人手足を
 腹破る即死に其余も大方ハ卒倒氣絶も中
 一兩人何の更もあらずし者もつら其絶氣し
 る者を介抱し飯り皆それし薬をうへ
 保類し平愈しりるが後二月ほど過るふとよ

寒熱暴發し一二日の間まらぬし死せり雷の
 毒の發せしと見へり其病体病犬あどの毒の發
 せ侍は類し数日とて發し死を侍も亦奇と
 きべし
 一矢疵つらぬき透りたるときハ矢の羽をさりとて先の方
 へ靜まぬくべし入たる方へ抜へうが又急卒と
 抜を忌みぬらぬ死ゆる靜ま抜其つと
 を急指し蓋まべし其疵口より氣りれ即
 死ありまむく蓋しそのち指をさる縫べし
 と言傳ふとせ

一 夕 終り あり たる 男の 己 加ま ず 郭 へ 入り あり くる 月乃 乃 乃 乃

とよ しく 休む 我 故 友 佐く 木 長 妻 乃 又の 長 昌 之 長 昌 以 歌 休

と 休 と 死 歎 甚 し しく 我も 所 不 生 れ しく ぞ 新 古 今 集 よ 以

歌 あり 入り ざる 産 乞 也 世 あり 小 時 過 ぬ れ む け 終 心 我 不 心 と

より 小 朽 果 ぬ ぬ 一 何 毎 念 の と あり とい けし を 長 妻 幼 妻

時 空 在 たり とも 悟 り たる 依 小 姿 細 とも 小 秀 逸 の 依 たり

一 寛 政 五 年 入 貢 の 阿 蘭 陀 持 隆 了 小 人 面 皮 乃 乃 乾 し たる 家

を し と 何 の 茶 又 用 中 の 小 也 奇 僻 の 志 あり とい たり 也

北窓瑣談卷之二畢

